

## 与論島の活性化のために

法文学部人文学科 3年 1115600443 熊谷希実

今回、与論島での滞在及び「島のしくみ」講義を通して私が感じた、あるいは考えたことについて述べる。現地の方から島の行政、観光、農業、漁業、文化と多面的にお話をうかがうことができたこの貴重な経験を踏まえ、自分が今まで持っていたイメージとの比較や新たな気づきをまとめる。

離島を含む、一般に「地方」と呼ばれる地域では人口の減少、高齢化の問題はついてまわり、与論島も例外ではない。人口減少率は鹿児島県内で4番目に低いとのことだったが、島内単体でみたときに減少の一途を辿っているのだから手放しで褒められたことではない。高齢化の面も加味すると、不謹慎ながらこの先30年間での不幸による人口減少はさらに極端に見受けられることとなろう。

現在、少子化対策として島外出産における金銭面の補助や子育て支援事業を行っているとのこと。しかし、新生児数の推移をみるに顕著な効果は現れていない。とはいえ、金銭的補助に行政から割ける額の上限もあるだろうし、少子化対策としてこれ以上の手は打てないというのが現状であろう。だとすれば、今いる島民の子どもを増やすための活動のみでなく、島外からの人口流入を増やすことが少子化および人口減少への指針となるだろう。すなわち、Iターン支援事業の推進である。うかがった限りでは、Iターンを推進するような活動は取り立てて行われていないよう受け取れた。Iターン者を積極的に受け入れられるだけの就職先がないことが背景として挙げられる。今後、人口が増えてく上での職不足というのは、観光客の増加を見込むことができればそれに比例して宿泊施設やレジャー施設のスタッフ、インストラクターの枠など観光業を主とした職員需要も生まれ解決できる、と講義の中であった。しかし、それは観光客の増加ありきの結果論的側面が強いようにも思われ、島外から移住するには現段階でのリスクは大きい。Iターン者を呼び込むには、先を見据えて就ける職が島にあることが重要事項である。そこで、地方創生の成功例として注目されるようになった島根県隠岐諸島の海士町の事例を調べてみた。

海士町では、CASという冷凍技術を導入し、島でとれた牡蠣などの海産物を鮮度を保ったまま都市部へ輸送することに成功した。「島でとれた」海産物が、都市部の市場でブランドとして評価されることは想像に難くない。島ならではの資源である。与論島では交通の便の問題で、鮮度を命とする漁業は水揚げ量に対して出荷先が限られてしまい、豊漁貧乏に陥ってしまうという話が印象に残っている。それだけに、海士町のこの取り組みは与論島でもうまく活用できる有効な手ではないかと考えた。

また、この技術は海産物だけでなく畜産物や農作物にも利用できるという。ここで私が推したいと思ったのは「島バナナ」である。島バナナは本土ではほとんど出回ることがないと聞く。本土で入手するには通販が一般的であり、その産地は沖縄県を主としている。島バナナを与論島の特産物として外に売り出すことができれば、与論島のネームも共に広められることになるのではないかと。そもそもとして島バナナに対してCASが有効であるかは、素人頭には正直わからないのだが、メロンやりんごはCAS活用の事例があるので可能

## 与論島の活性化のために

法文学部人文学科 3年 1115600443 熊谷希実

性として提示したい。設備費用としての初期投資はどうしても必要となるが、私は還元の見込みのある費用でありかつ産業であると思う。

さらに、この設備の導入により、施設職員をはじめその上に立つ技術者や、出荷取引先との間でマネジメントを担う人材も必要となる。ここに、Iターン者を呼び込む活路を見出せないか。たとえば都会生まれ都会育ちであり、農業漁業をこれから始めるのには不安や抵抗があるが島での生活に関心がある、といった層がIターンを希望する人の中にはいるのではないか。国民意識調査のここ数年の傾向をみるに、差し迫った問題としてIターンを希望する者は多くないのが現状のようである。しかし、いずれは地方に移住してみたい、と考えている都市部在住の生産年齢人口中の割合は30%以上に上る。これは、住む環境、職の環境が整っていれば、移住者を呼び込めるという観測の根拠となりはしないか。職があり生産年齢者の人口が増えれば、自然下の世代も増えていくことが見込める。下の世代が増えていけば教育機関の維持にもつながり、そこの雇用も安定する。新しい設備の導入という大きな選択にはなるが、その一手による影響は多岐に及ぶだろうと考察する。

今回こうして島での講義を聞くまで、地方の活性化に必要なのはまず観光業の興隆だろうというのが私の見解であった。観光客を呼び込むための施策をとって地方経済を潤すことが第一、極端に言えば経済的な成功さえすればあくまで「観光客」を対象とした事業を継続させていけばいいのではと考えていた。だが、こうして学ぶ機会を得られたことで、観光客だけでは住民は増えず、住民が増えなければ観光業も何も衰退を辿るという、気付いてみれば当たり前のことを考慮していなかったと自覚した。この自覚による考えの見直し、このレポートで観光業に触れなかった理由でもある。百合ヶ浜は言わずもがな観光スポットの要として機能しているし、ダイバーである私にとって与論島は「一度は訪れてみたい海」としてダイバー界ではわりとメジャーであることも、観光面での言及を避ける理由でもあった。また、漁業について講義をしてくださった方から、次世代を継げる人材が不足しているとの話もうかがった。直接うかがってはいないが農畜含む一次産業ではどこもそういった次世代への不安があると推測する。しかし、このまま島内を対象とした生産・消費を続けていけば、島内人口の減少と共に生産の需要も少なくなるだろうし、人材確保を優先として焦点を当てるのは難しいと捉えた。

どんな都市でも地方でも、ある「社会」はいい意味にも悪い意味にも循環して成り立っている。なにかひとつを変えるには、その前後のものから巡り巡って桶屋が儲かるまで、すべてが繋がっていることを意識しなくてはならない。そのため身動きが取れなくなってしまうというのが、与論島の現状であり、また、ゆるやかな衰退の原因ともなると考える。一方で、その「なにかひとつ」をうまく契機とできれば、桶屋まで届かせることができるのだから、少しでも先へ次へと巻き込んでいける一手を選ぶことが大切である。私はそれをCASに見たのだが、与論島の今後を考える上での一例として少しでも参考になればと思い、今回の集中講義のレポートとする。